

外来がん化学療法処方に対する薬局薬剤師の着眼点に 病院勤務経験の有無が及ぼす影響

大熊 祐美¹⁾、金井 良記²⁾、森山 京英³⁾、石黒 貴子⁴⁾、永野 悠馬⁵⁾、前田 守⁵⁾、
長谷川 佳孝⁵⁾、月岡 良太⁵⁾、森澤 あずさ⁵⁾、大石 美也⁵⁾

1)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 板橋店

2)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 前橋店

3)(株)アインファーマシーズ アイン薬局 三崎店

4)(株)アインファーマシーズ

5)(株)アインホールディングス

【目的】 がん治療が外来へシフトしつつあり、薬局薬剤師が積極的に関与することが求められるが、病院薬剤師との経験差は否めない。そこで、外来がん化学療法処方に対する病院薬剤師と薬局薬剤師の着眼点の違いについて、薬局薬剤師の病院勤務経験の有無から調査した。

【方法】 当社が関東甲信地方で運営する保険薬局 134 店舗に所属する薬局薬剤師 562 名を対象に、病院勤務歴と外来がん化学療法の処方監査時・服薬指導時に注視する項目を調査した。調査項目は、処方監査時は「レジメン情報」「投薬・休薬スケジュール」「支持療法」「臨床検査値」「体表面積」「処方漏れの疑い」「副作用歴」「併用禁忌」「添付文書記載の用量用法」、服薬指導時は「高頻度副作用の症状」「自宅での副作用予防対処法」「副作用の好発時期」「支持療法薬」「重篤な副作用の初期症状・対応方法」「併用注意薬」「健康食品の相互作用」「効能効果」とし、注視の程度を 5 段階で評価した。結果は、病院勤務経験の有無で経験群と未経験群に分け、有意水準 0.05 とした Welch's t 検定を用いて比較検討した(アイングループ医療研究倫理審査委員会承認番号:AHD-0071)。

【結果】 559 名から有効回答が得られた。服薬指導時の「重篤な副作用の初期症状・対応方法」は、経験群(n=88、4.84±0.37、Mean±SD.)の方が未経験群(n=471、4.73±0.55)よりも有意に注視していたが、その他の項目について両群間の有意差はみられなかった。

【考察】 外来がん化学療法の処方に対する着眼点について、病院勤務経験は大きく影響しないことが示唆された。唯一差異がみられた「重篤な副作用の初期症状・対応方法」は経験群の知識量・経験値の影響と考えられるが、未経験群の注目度も高く、「把握できる情報」等の環境面が強く影響する可能性が考えられる。

(第 31 回医療薬学会年会(2021 年 10 月, Web)にて発表, 一部要約)